
姫君様の紅茶な日常

しかはや緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫君様の紅茶な日常

【Nコード】

N6348W

【作者名】

しかはや緒

【あらすじ】

破天荒でやんちゃでじゃじゃ馬で……。なんだか同じような言葉の羅列のような気がします。それでも我らがディア様は世界一なのです！(「とある侍従の日記」より、抜粋)
ここはスタレイン王国。超超超平和なこの国で、何故だか一人だけ物騒なお姫様が。お姫様を抑えられるのは紅茶だけ。事件があれば、どうぞ王宮のお姫様のお部屋へ！とこの国の人々は口をそろえて言う。頭は切れるが愛想はよくないクローディア姫が巻き起こす、平和な国のちよつとした事件のお話。

とある侍従のたわごと

本日は晴天。

ディア様は今日も、ご機嫌が悪い。

その証拠に、何と一日に十九杯も紅茶を召し上がった。

これは新記録ではないだろうか。

苛々しているときに紅茶を召し上がる癖は、昔から変わらない。

しかし、いつも何に苛々しているか仰ってはくだらない。

本当に私たちは心配申し上げますよ、ディア様。

え、気持ち悪い？

いま、気持ち悪いって仰いました？

そんなあ、酷いですよお……。

そんな冷ややかな眼で見られたら、いくら私だって傷つきます。

こおんな、小さな頃からディア様を見ているのに、だんだんとディア様は私に冷たくなって……。

昔のディア様は、どんなにお可愛らしかったことか。

雷が大の苦手で、雷が鳴ると私に抱きついてきたのですよ。

覚えていらっしやらないでしょう？

時には一緒に寝てってせがまれたことも・・・。

あつ、ディア様、そんな見放した眼をしないで！

そしてラウルを引き連れて行ってしまわれないで！

ちょッ、ものを投げて私を追っ払おうとしているでしょう！

私を一人にしないでくださいよあつ！

?

うつらかな昼下がり。ひなたぼっこでもしたくなるような、全くもってすばらしい陽気の中。

乳白色の大理石がしかれた長い廊下、そのさらに奥にある、「王宮」の一室にて。

一人、その姫だけが顔をしかめていた。

「……暇ね、ホントに。」

はあ、と一つため息をつき、ついぞと言わんばかりに手元にあつた本のページをめくる。

がしかし、その内容が頭に入っているはずもなく。右から左どころか、見ようという意志さえない。

その証拠にその本は逆さだ。

「ディア様、何ですかその態度は。もう少しレディらしく、上品に……」

「ホント暇すぎるわ。エドゥアルド、あなた、何か事件を起こしてらっしゃい。そうすれば退屈じゃなくなるわ」

「人の話を聞いていらっしゃるんですかあなたは！」

という叫びもむなしく。クローディア姫は、なんていい案なのかしら、と本を閉じ、瞳を輝かせた。

「そうよ、事件がなければ自分で作ればいいんだわ。エドゥアルド、わたしちょっと出かけてくる」

「お待ちになってくださいディア様~~~~~ッ！」

ここはスタレイン王国。大陸の中ほどにある小国だ。

戦争に全く縁なし、の超超超平和な王国。

しかし、そんな平穏を乱す、危険因子が王宮に一人。

言わずとも知れている、長姫クローディアである。

王宮の人々にクローディアのことを聞けば、皆、言葉を濁らせる。

心中を代弁するならば、「本当のことを言っていないんですか!？」

出歩く先には事件が起こる、という曰く付きのこの姫君は、頭は切れるが愛想はない。

しかしそんな姫にも悩みはあるわけで……。

「おい、クローディア!お前、また城下へ行くつもりか」

意気揚々と変装をし始めたクローディアと、それを必死に止めようとしているエドワードの前に現れたのは、金髪碧眼の齡十七ほどの青年だった。

いかにも坊ちゃん坊ちゃんしているその整った顔を見て、クローディアは顔をしかめる。

「あらお兄さま、わたしのところにお出でになるなんて。珍しいこともあるものね。明日にでもエドワードがお紅茶になっているかしら」

なんだそのたとえば！つまりあり得ないことだと言いたいのか、意味不明すぎる……。

「ひどいですクローディア様……」

秀麗な顔をゆがませるエドワードを押しつけて、クローディアの兄、ベルナールは声を荒げた。

「そんなことよりだ！俺はお前に質問したのだぞ、年長者の質問に無視するつもりか」

「はい、行くつもりですけど、何か？お兄さまも一緒にいらっしやいます？」

「行きたくもないわ、お前と城下へなんて。それにお前、父上に外出禁止を言い渡されていたのではなかったのか？」

そんなこともあったかしら、と首を傾げるクローディアに、エド

ワールドはいまだに瞳を潤ませていった。

「はい、確かに国王様からそう賜りました」

「ほらみたことか。お前はどこかに行つては問題を起こすから、父上も頭を悩ませているんだ。分かつたら部屋に戻れ」

「嫌です」

きつぱりとしたその物言いにたじろきながらも、ベルナールは聞き分けのない妹をにらみつけた。

「いいから戻れ！いつになったらそのじゃじゃ馬は治るんだ。お前もう十六だろう！？」

「年は関係ありません。わたしは万年このままです」

「お、まえ、
.....
.....」
そんな性格の五十代がいたら気持ち悪いだろう。

想像してしまったのか、心なしかベルナールの顔は青ざめている。苦悩の表情のまま止まってしまったベルナールを一瞥して、クローディアはこほんと咳払いした。

「まあどうせ、お父様に言いつけられてわたしを見張っていたんで

しょうけれど。お父様には全く信頼されていませんものね。けれどいいのかしら、お兄さま」

「?.....なにがだ」

「お兄さまの【密かなご趣味】のこと、バラしてしまいますよ?」

その言葉をきくと、ベルナールはびくつと震えた。

何か考え込むように顎に手をあてるが、なにも思い浮かばなかったらしく、探るようにクローディアへ目をやる。

「な、なんなのだ、その【密かなご趣味】とは」

「あら、言ってしまったていいんですの?」

「ちょ、ちょっとまってクローディア。なにを言っているのかは分からんが.....お前、なにをしっている!??」

「それではお兄さま、失礼いたします。これから城下へ向かうので」

優雅な礼を一つして、クローディアは口元だけで笑った。

「ちょ.....ちょっとまって~~~~いっっっッッッ!」

勝った。

エドゥアルドは、自分の主が勝ったことをそのとき確信した。

？

「ディアさま、よろしいんですか？」

アメンスト
紫水晶の瞳を翳らせて、エドウアルドは主人に尋ねた。

肩よりも長いストレートの髪をきつちりと一つにまとめているその姿は、侍従というよりも貴族の執事然としている。

薄い唇を不安そうに歪め、長い睫毛は小刻みに震えていた。

すらりとした立ち姿は細身であるし、傾国の美姫のように美しい顔立ちである。

これが女であったなら……とつくづくクローディアは思っ
いや、男でも、肝っ玉があったなら。

「よろしいって、何が」

エドウアルドの問いに答えるクローディアの口調はそっけない。

釣り目気味の瞳でエドウアルドを一瞥し、黒みがかかった茶の髪を自分でまとめ始めた。

それを認めたエドゥアルドはあわててクローディアの髪を梳く。

「ベルナル殿下のことです。あんななさりようは、いくらディア様でも……」

「あら、うるさい八工を追い払っただけよ？ ああでもしなきゃ、城下どころか地獄の果てまで追ってくるもの」

クローディアの髪を一つの三つ編みにまとめながら、エドゥアルドは盛大なため息をついた。

「~~~~！ だからといって、実の兄君にトラップを仕掛けてお遊びになるのはお止めくださいっ！」

そうなのだ。

その後、【密かなご趣味】の真偽について執拗（ストーカー風味ともいう）に追いかけて来たベルナルに、どこから手に入れてきたものやら、クローディアは吹き矢を持ち出してきたのだ。

しかもあの時、ベルナルの頭上に数十本の槍が見えたのは、エドゥアルドの目の錯覚だろうか。

いやいやまさか、王宮の天井にそんなものあるわけが……。

ない、と言い切れないのが、クローディアの恐ろしいところだ。

エドゥアルドが慌てて止めなければ、今頃どうなっていたことや
ら……。

真実、今現在ベルナルは眠らされている。

これ以上クローディアが過激な手段に出ないように、先にエドゥアルドが眠り香を嗅がせたのだ。

とは言っても、きつちりとクローディアが腕と足を縄で縛ってしまっただが。

今回は未遂ですんだが、ひよんなきっかけでベルナルをぼっくり逝かせてしまうこともないとは……言い切れない。

「第一、あんな危険なもの、どこで手に入れたんです!？」

王の剣をとってみても、装飾のお飾り用で実用には程遠い超超超平和なこの国。

きっとその言葉を聞いた人は、百発百中の確率でそう思うことだろう。

「吹き矢だって、致死量の毒ではないし」

ってことは、少量であるにしろないにしろ、毒は含まれていた。そういうことなんですねぇ、クローディア姫ッ!?

という彼らの叫びも、聞かなかったこととしよう。

歩く兵器、災厄の具現。そんな異名がつかぬよう、祈るばかりだ。

……もつついているかも知れないが。

「入手経路はあなたも知っているはずよ、エドゥアルド。その人をよく知っているはずだし」

淡々とそう続けたクローディアの言葉に、エドゥアルドは驚愕した。

(そ、そんな危険な人物と面識がっ？まさかわたしに限ってそんなことは……)

ディア様じゃあるまいし。

そう心の片端に思ってしまったことは、墓まで持って行ってこの世から消滅させようとエドゥアルドはかたく胸に誓った。

思い浮かばないようなエドゥアルドの様子に、クローディアは嘆息をついた。

「セシリーよ。護身用と、多目的用にもらったの」

セシリー、という愛称に、エドゥアルドは今度こそ慟哭した。

いや、正しくはその表情のまま、石化した。

セシリー。

本名をセシリア。

事実上、エドゥアルドの妹。ちなみに血もきっちりしっかりと繋がっている。

趣味、黒魔術。

え、なんだって？と言う人のために、もう一度言おう。

「く・ろ・ま・じゅ・つ」。

それこそ、【密かなご趣味】と言っちゃつだ。

社交界での華やかな顔はどこへやら、自宅であるお屋敷では年中彼女の「呪文」が鳴り止まないそう。

エドゥアルド似の、それこそ傾国の美姫であるのに、魔方陣やら怪しい薬やらを作っている姿を思い浮かべると………呆れを通り越してなんだか悲しくなってくる。

エドゥアルドが家に帰りたがらない理由は、セシリアのせいという噂もあるほど、彼は実妹を避けて畏怖している。

石化したまま戻らない侍従を見やり、クローディアは再びため息をついた。

（肝っ玉の『き』の字もないわね。セシリーの爪の垢でも貰ってこようかしら）

ちなみに、クローディア姫とセシリア嬢の仲はすごぶるよい。類は友を呼ぶ、というやつだろうか。

「いつまでも石化してないで、さっさと準備なさい！今度こそ城下へ行くわよ！」

高らかなクローディアの声が、今日も王宮に不安をもたらした。

？（前書き）

ちよつとシリーズかも・・・

？

寒い、寂しい。寒い、寂しい……。

泥で濁った水溜りから何とか顔を上げ、袖口で額を拭う。

一枚しかもっていないシャツに、血と泥とが交じり合っただけでしまっていた。

こけた頬は殴られて赤くなり、額を触るとコブができています。

襲ってきたのは自分と同じ十三ほどの少年たち五人。

やっとの思いで稼いだ今日の分の生活費をすべて巻き上げられてしまった。

彼らと自分は違う。彼らはきっと孤児ではない。

それに、彼らが僕を嘲る理由はそれだけではないだろう。

僕は異邦人だから。

平和といわれるこの国でも、やはりと言つべきか孤児はです。

この国の人々はみな温厚で優しいが、そうは言っても子供は純粹

で残酷だ。

何が自分たちにとって異物なのか、恐ろしいくらい理解している。きつと街中へ行けば、誰となく手を差し伸べてくれるだろう。

けれど僕はそれをしたくなかった。

瞳を見れば、すぐに徒花イホワジンとばれてしまう。

だから僕は、路地裏で耐える。

湧き上がる鉄の味に思わず唾棄したが、その鮮やかな赤よりも空きつ腹のほうが深刻だった。

建物の壁へ背を預け、痛む頭に手を当てた。

ふと、空を見上げる。

澄み渡った空に、薄い絹雲がかかっている。

泣きたいくらいに綺麗な空に、僕は本当に泣きそうになったが、何とかこらえた。

泣けばきつと、頬の傷に涙がしみる。

まっさらに透き通った空は、きつとどこでも同じ。

いつでも自由で、悠然としていて、一転の曇りもない純潔な青で。

空へ向かって手を差し伸べた。

何もつかむことなど出来ないとわかっていて、それでもなげなしの力を振り絞り、思いつきり。

どこへも届かない、なにも掴めない。

そう思ったときだった。

掴む相手のいないはずのその手を、暖かく、すべらかな綺麗な手が掴み返していた。

その手の主は、空と同じ、澄んだ蒼碧色。

僕を上から覗き込むようにしていているその人は、女神様のよう
な優しい微笑を浮かべた。

「生きたいのなら、わたしについてきなさい」

凜と、飄々とした風のような声。

僕はその手を、意思を持って強く掴み返した。

スタレイン王国の首都、エル・ツァータはそれなりに豊かな都市だ。

市は活気にあふれ、行き交う人々には知れずと笑みが浮かんでいく。

陽気な者は道端で演奏する楽団にあわせて歌い、子供たちはそれを面白がって無邪気に駆け回っている。

始めてその様子を目にしたクローディアは、目を見張ったものだ。自分も一緒に駆け回ろうとしたが、エドワードに問答無用で城に連れ帰されてしまった。

その日は多分、史上最高に紅茶を飲んだ日だったと記憶している。

「ところでディア様、今日は何のご用事で城下に？」

濃い深緑のローブを被りながら、エドゥアルドは主に問う。

エドゥアルドの容姿があまりにも目立つたためにとった配慮なのだが……アヤシイ、怪しすぎる。

背の高いかにも怪しい男と、町娘の格好だが何か偉そうな娘という奇妙な二人組みになってしまっている。

「もう少し離れて歩いてちょうだい、エドゥアルド。別にこれと言った用事はないわ。ただ城下の様子を見てみたくなったの……強いて言えば何か新しい毒の情報でもないかと思って」

絶対、百パーセント後者ののが本音だ。しかし、毒って何だ、毒って。

心の中で突っ込みを入れるエドゥアルド。

しかし主人のこんな思考はもう慣れてしまっている（良くも悪くも）ので、表情には決して出さない。

「それに、セシリーから変な噂を聞いたのよ。なんでも、魔術を使うことが出来るものがあるっていうの。セシリーの侍女、エリスからの情報だから、真偽は確かではないけれど」

セシリー、ときいて再び石化しそうになったエドゥアルドだが、何とか意識を保つ。

またまたオカルトネタだ。

「曖昧ですね。ただ魔術が使える、と言うことしか分かっていないなんて」

「そうなのよ。なんでも瞳の色が普通ではなくて、緑だというのだけど。まあ、その人物については、今日はあまり見つける気はないわ」

何よりも、毒の情報よっ！今の時代、何といても情報戦なのよ、と呟くクローディアに、エドウアルドはため息をつく。

この国の何処に、そんな情報があるのか謎だ。

まあ、ついていけば分かるだろう。

エドウアルドはその後、そう思ったことを後悔することになる。

「魔女の館 l a c a s a d e l l a s t r a g g a 」

いかにも怪しそうな店の前で止まったクローディアに、エドウアルドは恐る恐る尋ねる。

「ディア様………？本当にここでよろしいんですか」

「ええ、目的の場所はここよ」

意気揚々と頷くクローディアを見て、今更ながらに思い出す。

そういえば、これまでクローディアが城下へ行く際、護衛として付き添った衛兵で、二度同じ顔を見たことがない。

曰く、「自分はもう、クローディア姫の城下護衛は謹んでお断り申し上げます！」だそうなの。

一体全体、何をやらかしたんだ、クローディア姫！？いやその前に、これから何をやらかそうとしているのだツッ！！??

冷や汗をかいているエドワードを尻目に、躊躇うこともなく店の中へ入っていくクローディア。

いやな予感しかない。入ってはだめだ、と頭のどこかで警鐘が鳴る。

しかし　ディア様を一人で行かせるわけにはっ………！！

理性と本能のせめぎ合いの後、嫌がる身体を何とか無理やり押さえ込み、クローディアに続いて店に足を踏み入れる。

と、とたんに、きつい異臭が鼻をついた。

(な、何だこの匂いは……………)

「御機嫌よう、ベラ。今日は何の薬を作っているのかしら」

にこやかに尋ねる視線の先には、妙齡の美しい女性がいた。

頬をくすぐる、長く波打つ赤毛に、小さくまとまったの赤い唇。くつきりとしたアーモンド形の瞳は薄暗くてよく分らないが、茶色がかって見える。

豊満な胸を強調するような、肌にぴったりとあったドレスがよく似合っている。

色香漂う、迫力美人だ。

そして、彼女の前には不釣り合いな大きな鍋。

「久しぶりだね、クロア。ここんこ顔見なかったけど、元気にしてたみたいだね」

店内を見渡すと、棚は本で埋め尽くされており、天井からは薬草やら、干乾びた蛙やら蛇やら、見たことがない生物までもがぶら下がっていた。

思わず吐き気を催すグロテスクさ。

耐性のないエドワードは、口を覆った。

「あら、そちらは新顔さん？なに、ものすごい美形じゃないのさ」

あんたのいい人？と尋ねるベラと呼ばれた女性に、クローディアは顔をしかめた。

「冗談でもそんなことを言わないで。そんなことになったら、世界からお紅茶がなくなったも同じだわ」

つまりは絶望的、ということか。

おおっと！エドワードは瀕死の状態だあっ！！！！

エドワードは軽く傷ついた。

「まあまあ。で、今日は何の用だい？」

「新しい毒の情報がないかと思って」

「そうさねえ……。これと言って入ってないけど。ああでも、暗器なら他国から入ってきてるよ」

聞き捨てならない内容に、エドワードは思わず顔を上げた。

(あ、暗器だとあっ！？ディア様はいつもこんなところからそんな情報をつ……………)

くらりと眩暈がする。

残り少ない生気が奪われそうだ。

「まあ、見せてちょうだい。 はじめてみるわ。 東の国のもの
かしら、どうやって使うのっ」

瞳を輝かせながら手に取ったのは、手にフィットするようにもち
手の部分が作られている、とげとげがたくさんついた道具。

見るからに痛そう。

「そのまま相手に切りつけてもいいし、先端に毒を塗っても効果的
だよ。 本当なら五十ガータのところを、クロアはお得意様だから今
回は三十ガータでどうだい？」

「んー。 どうしようかしら、性能が分からないと……。 ち
よつとエドウアルド、実験台になってくれない？」

爆弾発言に、残りの生気も、奪われた。

HPゼロ。

ティラリーン、鼻から牛乳。

絶望したとき特有の、あのBGMが聞こえる気がする。

「冗談よ、まったく。 冗談も通じない男なんて、お兄様以下よ」

そう言っただけのけるクローディアに、本気で泣きたくなったエドウ
アルドだった。

買い物も無事(?)に終え、もうそろそろ日が下がってくる時刻になろうとしていた。

「あら、もうこんな時間。さすがにそろそろ帰らなくてはね……」

少し寂しげに見えるクローディアの横顔を、エドワードはちらりと見る。

確かに、城下は刺激的で、新鮮だろう。

王宮なんてクローディアにとっては窮屈なだけ。

広い世界に出て行きたいという彼女の気持ちは、痛いほどよく分かった。

籠の中にいるのは、クローディアには似合わない気がする。

その気になれば、檻でもなんでも破っていきそうだが。

「帰りましょうか、ディア様」

エドワードがそう言ったときだった。

少年が五人ほど、路地裏から出てくるのを、クローディアは認めた。

日常の光景。

だが、なぜかそれがクローディアの癪に障る。

手には少しばかりの銅貨。

それを弄びながら、リーダー格らしき少年が嘲笑する。

「きもちわりー目。黙って俺らに従ってればいいのにさ、生意気に金なんて持ちやがって」

それにあわせて、少年たちは皆笑った。

しかし、逆にクローディアの眉間にはしわがよっていく。

気持ち悪い目？それはつまり……。

思惟に至ったときは、もう行動していた。

「あなたたち、ちょっといいかしら」

「ちょ、ディア様っ……………」

エドゥアルドの制止も聞かず、少年の腕を掴む。
突然呼び止められた少年たちは不機嫌そうに顔をしかめた。

「なんだよ」

「その、気持ち悪い目って何のこと？詳しく教えてくれないかしら」
なんだそのこと、と呟くと、クローディアの手を払い、少年は答える。

「路地裏にいるやつのことだよ。なんか目の色が変な緑色で、イホージンって呼ばれて……………」

その言葉にクローディアは目を見開き、駆け出していた。
狭い路地裏へと。

「ディア様、お待ちください！」

慌てているエドゥアルドの声が後ろから聞こえたが、かまわなかった。
った。

お世辞にも綺麗とは言いがたい、その通り。
ぬかるみに足を取られながら前へ走っていると、人影が見えた。

何かの儀式のように空へと手を差し出すその姿は、自分よりも幼

い少年のもの。

薄汚れたシャツを着ていて、頬もこけ、身体は傷でいっぱいだった。

けれど。

瞳だけは、綺麗だった。

思わず、その手を掴み返す。

驚いたように見開かれた翡翠色の瞳は、邪気を知らないかのよう
に澄んでいた。

自然に、笑みがこぼれる。

「生きたいのなら、わたしについてきなさい」

彼の手が、力強く、クローディアの手を握り返した。

？

「ところであなた、お紅茶は好き？」

空色の女神様の次の言葉は、それだった。

「まったくもう、ディア様は~~~~~……」

王宮にて。

何度目か分からないため息をつき、エドワードはそう呟いた。

あの光景を思い出すだけで頭が痛くなってくる。

誰か、半分は優しさから出来ている、あのバ　アリンをくれ〜
〜！！！！

クローディアを追いかけて路地裏へ入ってみれば、目に飛び込ん

できたのは貧相な少年をクロードディアが抱きしめている図、であった。

見ればその少年は衰弱しているようで、
けれど突っ込みたいのとはそこではない。

「何してるんですかディア様っつ！！！！」

確かにその少年の状態を見れば、母性本能がうずくのも分かる。

分かるがしかし。

レディとして、いや、世間的に考えてこれは不味いだろう。

しかも仮にもクロードディアはこの国の姫なのだ。

その少年を連れ帰ったはいいものの、まだ国王に許可も取っていないという有様。

これからどうするのか。

問題が山済み過ぎて、ストレスで頭がはげてこないか心配だ。

しかもあの後すぐに少年は気を失ってしまったので、運んでくるのが大変だった。

今は身綺麗にしてベッドに寝かせてある。

（それにしても、軽かった　　）

エドゥアルドは、少し目つきを鋭くして思惟にふける。

腕は骨のように細く、とても育ち盛りの少年には思えなかった。

きつと満足に食事を食べてこなかったのだろう。

「エドゥアルド、ちょっといいかしら」

すっかり着替え終わり、いつもどおりの服装に戻ったクローディアの声で、エドゥアルドは現実に引き戻される。

「はい、何でしょうディア様？」

「この国はそれなりに豊かで平和だと思っていたのだけれど、やはり孤児はでるのね」

いつもとは違う慎重な口調に、エドゥアルドは少し驚いた。

「そうですね……。けれどあの少年のようなケースはまれでしょう。彼は他国の民のようですし。何故スタレインに来たのかは分かりませんが、あのままの状態は確かによろしくありませんでした。保護したのは適切だったというべきです。翡翠色の瞳は周辺国では見かけませんから、スタレインからは遠い国の出身なのかも知れません」

遠い国

とクローディアはおうむがえしに呟く。

「……気に食わないわね。エドワード、お紅茶をお願い」

「かしこまりました」

トントン、とテーブルを人差し指で細かく叩く主人の様子を微笑ましく思いながら、エドワードはとづくに用意してあった紅茶をティーカップに注いだ。

クローディアが紅茶を所望することは、予想済みである。

「……あら、用意がいいわね。あなたの割には気が利くじゃない」

さらりと毒舌をかまししながら、紅茶を一口ふくむ。
見るからに穏やかになった様子に、エドワードはほっと息をついた。

ディア様の精神安定剤。
それが紅茶。

琥珀色に輝く液体に、エドワードは何度救われたことが。

お紅茶さま万歳！

「やっぱりあなたの淹れる紅茶が一番ね。ストレートティーに限るわ」

微笑むクローディア。

花が咲くような笑顔に、これだからディア様にはかなわない、とエドワードは思う。

いつも笑ってくださればいいのに……。

「今日はダーズリンでございます、ディア様。特徴的なマスカテルとパンジェンシーをお楽しみください」

香り高いダーズリン。

舌の上で転がる特徴的な香りは、よい渋みと相まって心を落ち着かせる。

琥珀の美しい見た目もさることながら、程よい甘さたるや紅茶の中の王たるに相応しい。

優れた独自の香りはまるでシャンパンのようである。

「美味しい。でも、まだまだね」

紅茶を引き立たせる甘いアップルパイをつつきながら、クローディアは言った。

「ダーズリンは茶葉が大きいからすべて開ききるのに時間がかかるのよ。最低でも三分、多くて五分は待ったほうがいいわ。茶葉のままが出し切れてない」

しかしその表情があまりにも幸せそうなので、エドウアルドは自然と笑い返した。

「精進いたします、我が主」

さく、とアップルパイを割ると、中からリンゴの紅茶漬けが出てくる。

砂糖に紅茶を加え、それにリンゴを漬けたものだ。

カスタードのとろける甘さが食欲をそそる。

エドウアルドは本当に、紅茶とお菓子作りが美味い。

ほくほくと笑顔で食べていると、隣の部屋から不吉な音が聞こえてきた。

ドンガラガッシャーン！

ん？どんがらがっしゃーん、だって？

隣の部屋といえば、例の少年が寝ているはずの部屋。

幸せ気分も吹っ飛んで、二人は顔を見合わせ、隣の部屋へと駆け出した。

部屋に入ると、ベッドにいるはずの人物はなぜか床にいて。

そして何故か甲冑の下敷きになっていた。

何故甲冑？という人のために説明しよう。

この甲冑は、クローディアが趣味で集めているものである（変装と言う名の名目で、これを着て衛兵の中に紛れ込んだことも。すぐ見つかったけどね、だって衛兵たちは甲冑着てないもん！）。

あつぷあつぷと、少年はつぶれて息も絶え絶え。
哀れに思ったエドワードは何とか助け起こしてやった。

「大丈夫ですか」

「けほつ……。はい、ありがとうございます……」

おお、しゃべったー！。

耳に心地よいボーイソプラノに、ほんわかした雰囲気に包まれる。

茶が混じった金色の髪はふわふわしてワタボウシのよう。

寝たおかげで体力が戻ったのか、頬にわずかばかり赤みが戻っていた。

「ああ、無事なようでよかったです。後で侍女に食事を持って来させましょつ」

彼は一瞬きよんとし、至極最もな問いかけをした。

「ところで、ここは何処でしょう……？」

あー、そうきたか。

確かになー、いきなりこんなただっ広い部屋で、でっかいベッドにいたら普通疑問だわなー！。

逡巡の後、エドワードは答える。

「えーと、何ていったらよいのか……。ここはスタレインの王宮です。君が倒れていたところを、こちらのクローディア姫が保護して

」

目を移した先にいたクローディアを見、少年は瞳を輝かせた。

「あなたが助けて下さったのですね。あの時は、女神様だとばかり思っていました……」

彼女の本性を知ったのなら、彼はどれほど落ち込むだろう。

そう考えてしまったエドワードであった、まる。

そうこうしているうちに、少年の動きが止まる。

え、おうきゆう？ひめ？

考えに至ったのか、驚愕で目が見開かれる。

「ところであなた、お紅茶は好き？」

「っておい、第一声がそれかよっ！」

彼は何を聞かれたのか分からなかったように、涙目のまま眉を寄せた。

「だから、お紅茶は好きかって聞いているの」

「好きも何も、僕今まで紅茶なんて飲んだことありません……」

その答えに満足したようにクローディアは不適な笑みを浮かべた。

「なら好きになってもらう必要があるわ。あなた名前は？」

「ら、ラウル、です」

「ラウル、あなた今日からわたし付きの侍従におなりなさい」

「「はいはいはいはいはいはい……」？」「

爆弾発言に二人そろって声を上げる。

あまりにも強引な決定、けれど「否」など許されるはずもなく。

ってディア様、国王様にまだ許可も取っていないんですがっ

!?

エドゥアルドの心の叫びだけが空の彼方に消えていった。

？（後書き）

ちなみに…

マスカテル⇨ダージリンの特徴的な香り

パンジェンシー⇨紅茶の刺激的な渋み

？（前書き）

第二章、突入！
短い……

？

大陸の中央部に位置するスタレイン王国。超超超平和といわれるこの国のやや北部に、首都エル・ツァータは存在する。

人口は多いが首都とは言っても名ばかりで、王宮からでも田園地帯と明るい森が望むことができる。

漁港とそれらが隣り合わせになっているという、なんとも不思議な光景だ。

王宮の一室からその風景を眺めながら、クローディアは優雅にモーニングティーを飲んでいた。

彼女の隣に控えていた二十歳前後の超絶美男子 エドゥアルドはその様子をはらはらと見つめる。

ああどうか、今日こそは大丈夫でありますように……と心から願いながら。

しかしその願いも空しく、クローディアの顔はだんだん険しいものとなっていく。

「なんなの、この味は。お紅茶を侮辱しているのかしら!？」

ふるふると肩を震わせ、いいわ、その喧嘩わたしが買おうじゃない、と目を据わらせる。

実はこの紅茶、いつもクローディアが好んで飲むエドゥアルドが淹れたものではなく、彼女の新しい侍従が淹れたものだ。

そのまずさと言ったら、世辞上手のエドゥアルドでさえ言葉がなくなるほどで。

紅茶至上主義であるクローディアにとっては言語道断だろう。

「紅茶修行」の名の下、クローディアが飲めるような（つまり最高級の）紅茶を入れられるようにエドゥアルドが指導したのだが、始めて一週間、クローディアが気に入るものを淹れられたためじゃない。

クローディアの冷たい視線の先にいる件の少年　　ラウルは怯えたように身体を震わせた。

「まあまあディア様。彼だって紅茶に触れて日も浅いわけですし、まったく前進していないというわけでもないのですからそんなに責めなくても……」

ラウルをクローディアが保護して約一週間が経つ。

「侍従にする」という爆弾発言からラウルの侍従修行、もとい「紅茶修行」が始まった。

彼も彼で努力しているのだ。

これでも最初よりはだいぶましになった。

どうやったたらこんな味が出せるのだろう、とエドゥアルドが不思議になるくらい苦味と渋みがきつい紅茶しか淹れることができなかったのに、今では少し苦いぐらいになった。

立派な進歩だ。

「すみませんクローディア姫！これからエーア先輩に教わって、もっと精進します、ですからお許しください……！！！」

エーア先輩とはエドゥアルドのことだ。

ラウルがどうしてもエドゥアルドの「ドウ」の発音が上手く出来ないため、好きに呼んでいい、と言ったらエーアさんと呼び始めてすっかり定着してしまった。

なんでもラウルの故郷に「エーアユルクィヤ」という紫色の石があり、それが瞳の色によく似ているらしい。

クローディアは少し顔をしかめ、盛大なため息をついた。

「クローディアなんて鬱陶しいから、ディアと呼んでちょうだい。もっと淹れ方を練習する必要があるよね。エドゥアルドの上を指して精進なさい」

「……はいつ！」

エドウアルドの上、「と言つのが嬉しかったのか、顔を輝かせてラウルは返事をする。

表情がころころと変わり、なんとも忙しいやつだ。

失礼します、と笑顔で部屋を出て行つたラウルを見送り、エドウアルドは懐から一通の手紙を取り出した。

「それはそうとディア様」

少し腰を屈めて、エドウアルドはクローディアの耳に顔を寄せる。

「例の双子からお手紙が来ていますが……いかがいたしましたしょう？」

「処分してちょうだい」

きつぱりと言い放つたクローディアに、エドウアルドは困つたように顔をしかめた。

「しかし無碍にするわけにも……」

「どうせくだらない依頼よ。目を通す価値もないわ。今日の手紙はそれだけ?」

はい、と頷いたエドゥアルドを見て、クローディアはティーカップを差し出した。

「ならちよつと出かけるわ。仕度をするから、紅茶を淹れなおして来てちよつだい」

けれどティーカップの中身は綺麗に空になっていて。

まずいと文句を言いながらもその紅茶を飲んだ主人がなんだか微笑ましくて。

エドゥアルドは優しく、微笑んだ。

これを見た自分の弟子はどんな顔をするだろう、と胸躍らせながら。

？（後書き）

双子ってだれだ！？

まあ双子については追々。

誤字脱字、文章変なところありましたら、ご報告よろしく願います。

？

ねえ、先生？

うん？

星の名前を教えて。

星と一口に言っても沢山あるからなあ。どの星だい？

んー、じゃああれは？あの一番大きくて明るい星。

あれか。あれはね、アリキウスだよ。星の中で一番輝くから、神々の愛した星と呼ばれているんだ。

じゃあ、下のあれは？あの青いの。

サクリオン。東に辿って、あの緑色の星がエリユース。そして

あれがテラ、エリバス。向こうのが……。

待って待って！一気に言われても分からないよ。ええと、あれがアリキウスで、あっちがサクリオンで……。

焦らずに、ゆっくりでいいんだよ。それにしても何故急に？

夜空を見ていると、吸い込まれそうにならない？そこに輝いている星たちがあんまり綺麗だから、お友達になりたいなあと思って。それにはまず、名前を覚えてあげなくちゃ。

覚えてあげれば、きっと星たちも喜ぶだろうね。わたしの名前の星もあるんだ。どれだと思う？

先生の名前の星が？どれだろう。

わたしの名前の星はね……

「相変わらず、無駄にでかいわね……」

目の前にそびえる建物を見上げながらそう呟くと、クローディアはゆっくりと馬車を降りた。

今現在クローディアとエドワードがいるのは、スタレイン王国の王立図書館である。

荘厳なたたずまいに度肝を抜かれるものも少なくない。

唯一、と言っているほど立派なこの図書館には、王国だけでなく諸外国からの書物も多く所蔵されており、それなりに資料も豊富である。

クローディアは何かとこの図書館に入り浸ることが多い。

外へ出ていなければ図書館にいる、と言っても過言ではないほどだ。

しかしここへ来るのは久々であった。

「ディア様、ラウルをおいてきて本当によかったのですか？」

控えめに問うエドワードを一瞥し、クローディアは軽くため息をつく。

なにせ彼は一週間も城の中にいるのだ。そりゃあ気も詰まることだろう。

だがしかし。

ラウルはここにいてもらっては困るのだ。

事実、ラウルには留守番を言い渡してある。

「本人がいる所で自分のことをあれこれ探られて、いい気がする？」
確かにクローディアも迷ったのだ。
ラウルに、彼のことを調べると告げるかどうか。

しかし言ったところで良い方向へ向かうとは思えないし、彼の過去の傷を抉り出してしまおうのではないか、と思ってしまう。

翡翠の瞳を見るたび、自分たちは彼のことを何一つ知らないのだ、と感じる。

裏で探るような真似は本当はしたくないが、知っておかなければならないと思う。

なにより、あの噂。魔術が使える、という緑色の瞳をもった人。それがラウルに関係あるのだろうか。

「ディア様が迷われた上でご決断されたことならば、私は何も申しません」

やけに真剣な顔でエドワードが言うものだから、クローディアは思わず嘖き出した。

「え、ちょ、ここって至極シリアスな場面ですよねっ!?!」

「ごめんなさい、いっつも腑抜けてる顔のあなたが嫌に真剣で、似合ってたから」

似合ってた。似合ってた。

ディア様の中の私ってどんだけダメダメなんですかつ……。……。

涙目になり、ちょっとかわいそうなエドワールドであった。

てか一日一回はディア様に涙目にされてるなー私、と思ったエドワールドであった。

「まあいいわ、図書館に入りましょう」

けろりと表情を改めたクローディアは、図書館の扉に手をかける。

キィィィッ と古くなった扉特有の音をだして開くと、

深々とした空気が二人を包んだ。

少しかびたような本のおいが、つんと鼻をつく。

足を踏み入れた瞬間、ひやっとした冷気に気づいた。

久々の図書館の感覚を思い出しながら、一步一步と進んでいく。

回りは一面、本だった。

ハードカバーの本が多数を占め、中には紙が紐で繋がられただけのものもある。

奥にある螺旋階段は上にも下にも、どちらにも長く伸びていた。

人気は少なく、研究者と思われる人が数人程度しか見受けられない。

クローディアに気づいた何人かが礼をとるが、クローディアは何も言わず、手で制した。

「ねえエドワード、他国の人種についての本って、どの分野かしら」

「うーん……。歴史や宗教あたりでしょうか。しかしこれだけの量を調べるとなると、ちょっとやそつではいきませんよ」

「わかっているわ。見つからないことも覚悟してる」

歴史や宗教って言うと、地下三階あたりかしら、と螺旋階段に足をかける。

と、クローディアを呼び止める声があった。

「お待ちください、クローディア姫殿下！」

正式な呼び方に、クローディアは少し顔をしかめた。

堅苦しいことが何よりも嫌いなのだ。

不機嫌オーラを感じ取ったエドワードは、思わず相手に同情した。

……君に幸あれ。

呼び止めたのは、真っ白いひげを生やしたおっさん……いやいや、ご高齢の男性だった。

ちよつとおながが出ているからって、加齢臭を漂わせてるからって、決して気にはしてはいけない。ましてや口にはしてはいけない。

「お留めして申し訳ございません。わたくし、この王立図書館の総責任者兼館長のケイルス・サストレイと申します」

顔のわりに、名前は爽やかなんだー。

そんなことを思ったとしても、口には出してはいけないぞ決して！
年長者は立てるものなんだから。

けれどあの姫君にそんな常識など通じるはずもなく（まあ機嫌も悪かったしね）。

「顔に似合わない爽やかな名前ね。似合わなすぎて、覚えるのが大変だわ」

皮肉たっぷりの言葉に、ケイルスは顔を引きつらせた。
すかさずクローディアの横にいたエドワードがフォローをいれる。

「この度は館長自らのお出でとは、恐悦至極に存じます。クローディア姫もお忙しい身の上、それほどお時間はおとりできませんが、どういったご用件でしょうか？」

ケイルスは気を取り直してクローディアに向き合った。

「わたくし、クローディア様はさまざまな事件を解決に導いてくださる、と拝聴いたしまして。お力添えをと参った所存にございませ

回りくどいなあと思いながらも、クローディアはしげしげ問う。

「何かあったのですか」

それが

、と言ったケイルスの表情は硬かった。

「本が、盗まれたのでございます」

事件の匂いに、クローディアは目を光らせ、エドワードは肩をすくめてため息をこぼした。

？

「その盗まれた本というのが……」

長く息を吐き出して、自分でも意識していないのか顔を酷くしかめる。

ケイルスの語った内容はこうだった。

今回盗まれたものは、「本」というのは適切ではない。

何故ならそれはある女性が自分の愛する人へ綴った手紙のようなものだからである。

しかしその量が半端でなく、本と言っても差し支えない量だった。

ただ延々と書き連ねられた、相手への愛の言葉。

何処からどう広まったのか、その女性の手紙は巷で一躍有名となった。

女性には共感するものや、その手紙の中から言葉をかりて自分の恋人へ恋文を書く者も絶えなかったのだという。

決して相手の名前や自分の名前は手紙中で書くことはなく、読者の中で彼女は「オフィーリア」という偽名で呼ばれていた。

本当に「オフィーリア」に想う相手がいいたのかは定かではないが、彼女はまるで一つの物語のようなその手紙を書き続けた。

ついにはその手紙を元に歌劇を書き下ろす、という話まで持ち上がったのだと言う。

「その直後なのです、その手紙と歌劇用に書き下ろしていた台本が盗まれたのは」

巷で有名になったとはいえ、オフィーリアの手紙は書き写されることなく、彼女自身の筆で書かれた手紙だけが回し読みされる形で出回っていたのだという。

だから複製は存在せず、誰もが無料で読むことが出来る王立図書館に収められた。

何より、オフィーリア自身が模作されることを嫌がったのだそう
だ。

「その女性は少し精神状態が不安で、身体も強くはないのです。こちらとしても彼女の作品を保管していたのに盗まれたとなれば、罪悪感があると申しますか……」

今回のことで酷く心を痛め、彼女は今寝たきりの状態で……、とケイルスは瞳を伏せた。

クローディアはその弱りきった様子を静かに見つめ、何か考えているようだった。

そして不意に口を開く。

「聞いていると、あなたはどうもその『オフィーリア』という女性と面識があるようだけれど？」

クローディアの言葉に、ケイルスは目を見開く。

「精神状態が不安定で身体も強くない、なんて情報、全くの他人じや知り得ないことだわ」

あ、ちょっといらいらしてる、とエドゥアルドは思った。

ああ、ここに紅茶があれば。

どうかディア様、キレてしまわないで〜！！

エドゥアルドは内心ドキドキである。

「……その通りでございます。わたくしはその女性と面識がございません。というか、わたくしの血縁の者でございます」

しげるような口調で、随分遠まわしな言い方だ。

ならば何故最初からそういわなかったのだらうか。

ケイルスは続けた。

「『オフィーリア』、いえ、本名はクリスティーヌといいます。クリスティーヌはわたくしの息子の娘、つまり孫にあたります。生まれつき身体が弱く、部屋に籠っていることが多かったのです。初め、わたくしも『オフィーリア』がクリスティーヌだとは思いませんでした。そうと知れたときにはさすがに驚きました」

孫。彼の年齢から想定すると、二十歳前だろうか。

「クリスティーヌは息子夫婦が決めた許婚がいるのですが、どうも折り合いが悪いらしく。許婚本人へ向けた手紙だとしても、嫁入り前の娘がこんなものを書いていたなんて知れたら世間に顔向けできません。出来ることならば、内密に願います」

てつきり妙齡の女性が書いているものと思っていたエドゥアルドは少し驚いた。

「オフィーリアの手紙」についてはエドゥアルドも目にすることがあった。

城の使用人（もちろん女性）が「恋愛の指南書」として貸してくれたのだ。

熱烈な愛の言葉もさることながら、洗練されたその文章や語彙にはエドゥアルドも舌をまいた。

よほど書きなれた人物が執筆しているのだろうと思いついたが、まさか十代の淑女が書いていたものだったとは。

「ご心配なく。秘密は厳守します。ところでミスター、」

嫌味のように「ミスター」を強調させ、クローディアは口端を上げた。

「そのミセス・クリスティーヌのところへ案内して下さいませんか」と?」「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6348w/>

姫君様の紅茶な日常

2011年12月18日00時46分発行